

「媒介」とは何か

——媒介論的現象学のために——¹

佐藤 駿
(東北大学)

平易で読みやすい文章、卓抜な表現と比喻、一步踏み込んだ独自の解釈——田口の著書『現象学という思考』は、現象学(とりわけフッサールのそれ)を研究し、それについて伝えるべきことがあるような人間にとっては、心地好い嫉妬を覚えるような美点をいくつも具えている²。「本書が提示しているのは、最終的には、筆者が考える現象学であり、それをスタンダードなものとするのは危険である」(26頁)と断っているが、本書によって提示されている読みと理解が、フッサールの思考に付き添い、ともに真剣に考えた末にのみ展開できる現象学の姿であるということは、フッサール現象学を多少なりとも知る者の眼には明らかだろう。その射程がフッサール現象学の理解に留まるものでは決してないこと、付け加えるまでもなく、本書が再び私たちにとって「自ら現象学的思考を始めるための媒介」(27頁)となりうることに疑いの余地はない³。

本書は、著者自身が序章に述べているように、現象学を「あたりまえ」なもの(こと)、自明性を問う学問として描き出そうとする姿勢によって貫かれている。その方法も一貫している。「自明性」——「様々な〈リアリティ〉」と呼ぶことができるだろう——を経験と現象の流れのうちに差し戻し、それが形をとって現われてくるプロ

1. 本稿は2015年12月19日に東海大学・高輪キャンパスにて行なわれた「フッサール研究会特別企画・田口茂著『現象学という思考』合評会」で発表された原稿を修正してなったものである。

2. 田口茂『現象学という思考 〈自明なものの知へ〉』筑摩書房、2015年。以下「本書」と略記し、引用・参照にあたっては頁数のみを示す。

3. とりわけ第6章で展開されている変様論は、『フッサールにおける〈原自我〉の問題』(法政大学出版局、2010年)に見られた変様概念の分析をさらに展開し、その基礎概念の射程と含意を引き出している点で、専門の現象学者にとっても注目に値する。

セスを明らかにするという手続きである。実際、本書が放っている魅力の少なくとも一端は、様々な〈リアリティ〉が経験と現象の流れのうちに浮び上がり、生成してくるその現場を生々しく描き出しえているという点にある。本書には「志向性」という言葉はキーワードとしては現われていないけれども、メルロ＝ポンティの有名なフレーズを借りるなら、「われわれを世界に結びつけている志向的な糸を出現させるために」、見事にその糸を「緩め」て見せていると言ってさしつかえないであろう⁴。

そのプロセスを田口はしばしば「媒介」というキーワードを用いて論じている。媒介という概念の重要性は終章で次のように言われているところから明らかであろう。

このような諸々の参照点〔物・本質・自我などの〕は、現象の流れをさまざまな仕方で屈折させる媒介点にほかならないのであって、それだけを孤立させて考察するよりも、それがいかなる現象と現象とを媒介しているのか、という仕方で問いを立てていった方が、おそらく得られるものははるかに多い。諸現象を分断し、孤立化させるのではなく、それらの接続関係を分析することこそ、流れる現象から少しも離れずに、現に現われているがままの「事象そのもの」を分析しようとする現象学に求められている課題ではなかろうか。本書の叙述は、このような課題を浮かび上がらせることを主眼としていたと言ってよい（259頁）。

しかし、媒介という視点のオリジナリティと含蓄は、読み手にとって少しく困惑を覚えさせる可能性がある。そこで、以下では、特に第二章「本質」と第七章「間主観性」での田口の論述に焦点を絞り、媒介という概念に見出される〈揺らぎ〉について考えてみたい。「揺らぎ」と言うのは、そこには必ずしも一義的でない様々な媒介の概念があるように見えるからである。

1. 本質と媒介

1.1. 本質とは何か

本質というのは、時間的・空間的なものではない——言い換えればリアルなものではなくて、イデア的なものである。しかし、リアルな対象（事物）がそうであるようには、本質は見えない。にもかかわらず、フッサールは、我々はそれを直観するので

4. Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, 14. [竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学1』1967年；竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学2』みすず書房, 1974年]

という。田口はこのような主張を次のように捌いてみせる。手がかりとなるのは「連合」の現象である。すなわち「一切の現象を、一切の相互的な結びつきなしに見ることはできない。円形は否応なしに円形と結びつき、赤色は否応なしに赤色と結びついてしまう」(112頁)。

「結びつき」の現象が生じたときに、その「結びつき」を名指す言葉、たとえば(赤と赤が結びつく場合には)「赤」という言葉が出てくるが、フッサールが「本質」と呼ぶのは、さしあたりそのような言葉に対応するものである。赤い契機と赤い契機が不可避免的に結びついてしまうとき、そこでわれわれは「赤」というある普遍的なもの(多様な現象を横断するもの)と関わっている。この結びつきの現象とはまた別に、「赤」という実体を想定する必要はない。しかし、この結びつきが、個々の現象より後に存在するわけではないことはわかるだろう。赤い諸契機が現われるときには、「赤」という結びつきの現象も、同時にある(116頁)。

田口にしたがえば、この「個々の現象より後に存在するわけではない」というあり方こそ、「本質直観」という言い方を可能にするものにほかならない。すなわち「ここで与えられているものが、何か別の経験から組み立てられた二次的・副次的な産物ではなく、それ自体として与えられている基礎的な現象の一つであるということ」(109頁)、「そのような基礎的な現象を、『端的につかむ』ということ」(110頁)が「直観」と呼ばれるからである。

上のような現象相互の結びつき(連合)は、単に現に経験されているものにかぎって生じるわけではない。「過去に見た赤もこれから見るであろう無数の赤も、いま目の前の野原一面に広がっている赤い花々も、すべてこの『赤』の結びつきという共通の場においてつながっている」。そして「あらゆる時間上、あらゆる空間上の『赤』の現象が、すべて不可避免的に『結びつく』という現象を不可避免的に伴っている」かぎり、「個々の赤いものとは別に、ずっと持続している『赤』というもう一つの対象」を想定する必要がない。むしろ「この横断的結びつきの『無限性』が洞察されたとき、本質の洞察、すなわち『本質直観』ということが語られる」(117-8頁)のである。

〈赤という本質が目に見える世界とは別のところにある〉といった、場合によっては神秘的にも聞こえるような主張をフッサールはしていない。「本質」について語られる際のポイントは、徹頭徹尾、現象相互の結びつくそのありさまにあり、田口が用いるもう一つの印象的なメタファーでは、無数の現象どうしの「響き合い」(125頁)にある。それゆえ、田口によれば『「本質の構成」を明らかにする』ということは、「現象のうちにはじめて何らかの響き合いを発見したときのことを、思い出すこと」

(125-6 頁)にほかならない。その意味で、まさしく現象学は〈起源の哲学〉なのだととも言えよう。

1.2. 本質と媒介をめぐる二つの解釈？

田口は本質について論じるこの章で、「媒介」というキーワードを本格的に導入している。上に見たように、例えば赤の現象は、時空上のあらゆる現実的・可能的赤と結びつき、響き合う。

[1] 何であれ、いどこであつても、赤いものが出てくれば、そこにまた結びつきが成立する。その可能性には、時間的にも空間的にも、限界がない。この無際限の結びつきの媒介者となっているような点を名指して、フッサールは「本質」と呼ぶのである(120 頁 [強調引用者])。

続けてこう言われる。

[2] フッサール自身が語っていることではないが、「本質」と呼ばれているものを、おかしな誤解に陥らずに理解するためには、「媒介」という観点が重要になるように思われる。「本質」と呼ばれているものは、実際には、一つの独立した対象であるというよりも、多様な契機の間「結びつきの現象」である、と言ってもよいとすれば、「本質」とは一つの「媒介」の現象そのものを名指したものだと言っても、それほど不適切とは言えないのではないか(120 頁 [強調引用者])。

媒介という概念が導入されるまさにこの場所で、「本質」が何を意味しているか、何を名指しているのか、二つの考えが示されているように思う。

まずは形式的に考えよう。媒介とは、その最も単純なかたちでは、何かふたつのもの (A, B) が、何かひとつのもの (M) によって結びつけられるという関係を意味する。

$$A - M - B$$

この M を「媒介者」と呼ぼう。

さて、上記 1 の引用では、 A と B というふたつの現象を結びつける媒介者 M が本質であると言われているように見える。しかし他方、引用 2 では、本質は媒介者 M であるというよりは、むしろ A, B が M によってとりもたれるという現象ないし出来事そのものが本質であると言われている。一方は媒介者を「本質」と呼び、他方は

媒介という現象を「本質」と呼んでいる。そのままでは、両者は別のことを言うように思われるのだが、果たして田口の意図はどうだろうか。

もしかすると「媒介者」か「媒介」という点にこだわるのは、つまらない穿鑿でしかないと思う向きもあるかもしれないので、急いで補っておきたい。本質を「直観する」とか、本質そのものが「それ自体として与えられる」という言い回しに実質的な意味を与えようとする場合には、この論点はそれなりに重要であると思う。媒介という現象が経験の流れのうちで生じているとき、だからといって、媒介者もまた「直観されている」ないし「それ自体として与えられている」と言えるとはかぎらないからである。あるものの例をどれほどたくさん挙げることができたとしても、その人がそのものの本質（形相）をしかと捉えているとは必ずしも言えない——そういう考え方も、少なくとも可能ではある。実際、ソクラテスが人々に「*X*とは何か」と問うとき、彼が求めていたのは常に、*X*であるような何かを枚挙することではなく、むしろそれらをまさしく *X* たらしめている何かであった⁵。別な言い方をすれば、〈媒介は生じている、しかしその媒介者たる何かを彼がつかんでいない〉ということがありうるのである。そのとき、私たちは本質を直観していると言えるであろうか。そしてそれは、フッサールが「本質直観」について語る際に意味していたことをとらえきれているだろうか⁶。

2. 間主観性と媒介

2.1. 身体の「響き合い」

本書の第七章、田口は「間主観性」の問題圏に「身体的な『響き合い』」（223 頁）という独特な経験を描き出すことによってアプローチしている。

身体の「響き合い」とは何か。「他人の肌の柔らかさ、その質感（肌理）、その動きのきわめて微妙な特徴などが、自分の身体との間に」作り出す「直観的な統一」。「他人の身体が現われたとき、その身体の『身体らしい感じ』[が]、他人の身体と自分の身体との間に」ただちに生じさせる「強い意味での重ね合い」。他人の身体は私の身体ではないが、しかし「どこかで、あたかもそれが自分の身体であるかのように、私

5. 例えば以下を参照。『ラケス』190e-192b；『ヒippias（大）』287c-288b；『エウテュブロン』6d-e。

6. フッサールはしばしば本質というものを「新種の対象」だとあえて言うのは、この点からしても理由のないことではない。Cf. e.g., III/1, 14; Edmund Husserl, *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner Verlag, 1999, 435f.

は自らのうちに他人の身体を感じとる」その感覚（226-7 頁）。そのような「間身体的な振動」（229 頁）——。田口はここで様々な表現を慎重に重ねながら、この記述しがたい事態を言い当てようとしている。

フッサール自身は、これを端的に「対化 (Paarung)」と呼んでいた。田口の読みはこうである。——この「対化」なるものが意味しているのは、「一つの独立した身体と、別の独立した身体とが、外的に関係し合うといった事態ではな」く、「むしろ、どちらの身体も、ただ一つの『対』の不可分の契機にすぎないのであ」って、「ここで支配的なものとして働いているのは、私の身体でも他の身体でもなく、『対』そのものなのである」（230 頁）。

どういうことか。媒介という概念を再び用いながら、田口は次のように述べている。

ここでは、「対」そのものが一種の「媒介」として働いている。媒介されるものが先に成立していて、それから媒介という関係に入るのではない。対になるものは、この媒介という出来事の帰結として、はじめて対として成り立つ。「対化」という出来事なしに、対になるものたちもありえない。他方、対になるものたちを離れて、対化があることもない。[……] 対になるものたちが対になるものたちとなる出来事こそ、まさしく「対化」と呼ばれるのだからである。対になるものたちがあってはじめて、対化は対化として成立する。だから、対化とはまさしく「媒介」の出来事そのものである。そこで対化は、対になるものたちが相互に転換・媒介されつつ自己生成する出来事を意味している。独立的な諸契機を前提して考えるのではなく、あくまで流れる出来事のみがあって、そのなかにはじめて固定的な諸契機も現われてくると考えるべきであろう（230-1 頁）。

2.2. 媒介者なき媒介？

思うに、この章は、それまでの論述に培われてきた考え方や概念が縦横に用いられ、本書の圧巻をなしている。「響き合い (対化)」「媒介」「変様」といった様々なパースペクティブが交錯しつつ、当の現象が読者の前に独特の〈奥行き〉をもって現れてくる。その筆の運びもスムーズである。だが、すべてがすべてクリアかというところ必ずしも肯定的には答えられない部分もある。ここでは、そのなかに再び現われてくる媒介概念を取り上げて、その独特な含みに目を向けよう。

田口は上で、ここに見出される媒介のあり方をこう描いている——「媒介されるものが先に成立していて、それから媒介という関係に入るのではな」く、「対になるも

のは、この媒介という出来事の帰結として、はじめて対として成り立つ」。さらに「対化とはまさしく『媒介』の出来事そのもの」だが、それが意味しているのは、「対になるものたちが相互に転換・媒介されつつ自己生成する出来事」である。一見して、ここには本質のときに見られた媒介者という契機——本質がそれであると言われえたとような媒介点⁷が欠けているように見える。とすると、これがどのような意味で「媒介」と呼ばれうるのかが問題とされてしかるべきであろう。というのも、繰り返すが、素朴に形式的に見れば、媒介とは〈何か (A) が何か (M) によって何か (B) に媒介される〉という構造を持つように思われるからである⁷。

このように思われるのは、媒介者が不在からではなく、むしろ媒介者と媒介されるものが同一だからなのかもしれない。言い方がニュアンスに富んでいるのではつきりと断言はできないが、田口は身体そのものが媒介者だということを示唆している。

- ・ 「身体はこのように、顕著な媒介的性格をもつ」(236 頁)。
- ・ 「最初に生きられているのは、身体の影響合いであり、そこから個別的な身体が切り出されてくるのである。逆に言えば、『一つの身体』というものは、そもそも影響合いのための『媒介』としてのみ、その存立を確保しているのである」(236 頁)。
- ・ 「身体は『転換点』として、媒介そのものとしてある」(238 頁)。

身体は媒介されるものであると同時に、媒介するものでもあるということが、ここで語られているように見えるのである。そうだとすれば(再び図式的に示すと) A と B が M によって媒介されるという構造のうち、 A にあたるものと M にあたるものが同じものであるような媒介の現象があるということになる。

$$A - A - B$$

しかし、このような安易な図式化は、田口の語ろうとしている現象をおそらく覆い隠してしまうことになるだろう。実際、田口がここで「媒介」と同時に「変様」について語っていることには重要な意味がある。媒介される A としての私の身体と、媒介

7. 田口はまた、自我についても媒介という概念が手がかりになるはずだと考えているが、そこでは逆に「媒介者」としての自我のニュアンスが強い。すなわち、「自我」は「経験のさまざまなシーケンスの『媒介』」(191 頁)であり、それは「諸現象の『間』に、『媒介』として現われるものなのである」(191 頁)。とはいえ、ここでも出来事としての媒介についても語られている。「現象が現象と媒介されるという具体的な出来事を離れてしまったら、自我は影も形もなくなってしまう」(192 頁)。こうして私たちは、ここでも媒介概念の〈揺らぎ〉に戸惑う。

する M の位置に置かれた私の身体とは、なるほど表層的には同一であるとは言いようがないが、しかしそこには根本的な違いがある。媒介する M の位置に置かれる私の身体は、他の身体と並べられて数えられる複数の身体のうちの一つであるというにすぎないような身体ではない。むしろそれは、いわば他の身体がそこから他の身体としての意味をはじめて獲得することになるような身体、またそれとコントラストをなして「私の」身体として際立ってくるような「原身体」なのである⁸。

原身体としての私の身体は、「複数の身体が独立的・並列的に捉えられるように」(238頁)なる以前の何かである。しかしその何かは、やはり「私の身体」としてしか表現しようがない。だからこそ、媒介者がここでは欠けているように見える——そのように整理することができるかもしれない。

$A - [A] - B$

果たしてこのような理解が田口の論述のポイントを適切に言い当てられているかは甚だ心許ない。仮にこのように理解することが許されたとしよう。しかし、このような現象が「媒介」と呼ばれることのポイントは、依然として必ずしも明確ではないように思う。いや、もっと正確に疑問を述べよう。仮にこれが「媒介」と呼ばれることを認めたとしても、その媒介は、本質(や自我)について語られた「媒介」と同じ媒介——構造的に同型の媒介なのだろうか。

以上、「本質」と「間主観性」の話題に関係づけて媒介概念の内実について問うてきた。極論すれば、私の疑問は、「媒介とは何であり、いったいどのような一般的構造を持つ現象なのか」という問いに尽きていると言ってもよいだろう。私が上でしばしばあまりに図式的な整理をしているように見えたなら、それはこの問いをはっきり見えるようにしたからにはほかならない。とりわけ、この媒介という概念が「物」「本質」「自我」「間主観性」というトピックを通底するひとつのモチーフたりえているかどうかは、改めて慎重に検討されねばならないだろう。私の読むかぎりでは、媒介という概念そのものにはまだ〈揺らぎ〉があるように見える。むしろ、この読みは否定されねばならないだろう。しかし、私と同じように躓く読者もいるだろう。

あるいは、媒介という概念とアイディアは生まれたばかりでまだ揺り籠のなかに

8. この語(「原身体 *Urleib*」)のフッサール自身の使用法としては、例えば以下を見よ。XIII, 57; XIV, 9.

あるのかもしれない。もしそうだとすれば、私が本稿で述べてきたことが、この概念を洗練し、現象学にとって有効な視座を与える鍵概念となるプロセスのうちに——あるいはもっと明確に言って「媒介論的現象学」の構想のために、消極的にでも何らかの効用を持ちえたらと願って、小論を結ぶことにする⁹。

9. 田口茂「媒介論的現象学の構想——フッサールと共に、フッサールを超えて——」*Heidgger Forum*, vol. 9, 2015.